

展望 言葉に詩が宿るとき

三沢左右

春の夜の夢のうき橋とだえて峯にわか

るよこぐもの空

藤原定家・春上

露はらふねぞめは秋の昔にて見はてぬ夢

にのこるおもかけ

俊成卿女・恋四

「新古今和歌集」の二首。どちらも語の幹旋が優美で、言外の情感の豊かさが見事だ。

技巧が洗練され、同時に形式化の道をたどった古典和歌。言葉の用い方には先例が何よりも重視された。そうした和歌に比べると、現代短歌は格段に自由だ。しかしその自由の中で、われわれはいかにして自身の言葉を短歌という作品に昇華すればよいのか。

千葉優作の第一歌集『あるはなく』を読んだ。このタイトルは「新古今和歌集」収録の小野小町の一首から採用したという。また、各章の初めにも和歌が引用される。古典和歌の詩情を変奏して現代短歌に響かせようという意図があるのだろう。その意図は、たとえば次の一首の「春の夜」といった語に表れているように思われる。

春の夜の柱時計のねちを巻き貝に生まれ
たやうなさびしざ

しかし千葉は同時に、現代短歌の抒情も自

分のものにして、あざやかに表現する。

春はもうほくを忘れてしまふからとても

しづかな倒立だらう

泣いたあとしづかに顔を拭ふ朝あなたは

冬のけやきにもどる

喩や象徴を真正面から実景に対峙させるのではなく、言葉を挿し込む角度をかすかに変えることで、隠れていた言葉の響き合いを読者に気づかせる点に、現代短歌の特徴があると私は考える。

一見詩的でない言葉を詩に転換する技巧が冴える一首目。上の句と関連が薄い「倒立」への飛躍が喪失感を見事に表現する。順接「から」の果たす役割は大きい。二首目、下の句の「冬のけやき」に至って、読者の心の中には上の句の「泣いた」「しづか」「朝」という情景の輪郭が際立つ。豊かな語彙を土台に、意味と情感の接点をあざやかに詩にする、繊細な感覚の作者だ。

春日いづみの第五歌集『地球見』は、また全く手触りが異なる。春日作品は、題材は豊

富なもの、決して語彙が豊富なわけではない。春日の持ち味は、ひとつの主題や出来事を一首から手放さない粘り強さだ。素直な言葉選びで、出来事や感情の帰結をあますところなく一首に込める。

朝があり夕べがありてわが庭に
柿の実にはかに色づき始む

エッセンバツハの温もりのある第九聴

きこころの煤を払ふ歳晚

時間の推移をひとつひとつ確認する趣の一首目。作者と読者の歩調を合わせるように詠

まれたこの歌は、歌集巻頭に置かれている。第九のコンサートを詠んだ季節感あふれる二

首目。言葉を飛躍させることなく、「温もり」「煤を払ふ」と詠むことで感動を丹念に描き

上げる。

グエン・ホン・セン監督『無人の野』ベトナム

飛機去りて水の中より引き上げしポリ袋

より乳飲み子の声

映画のシナリオの採録という仕事に長年携わってきた作者の、映画を題材とした一連は圧巻だ。その中の一首。たった一つの場面を細やかに描写することで、感動の源泉が読者に提示される。詩的な語の喚起力に頼らない、感動から生まれた言葉自体の力を再認識させる作品群だ。